

## 第2回 岐阜県AI活用研究会

# 民間における活用事例

- 1 企業での活用事例
- 2 本県で活躍されているIT企業（6社） インタビュー結果

【岐阜県商工労働部／(公財)ソフトピアジャパン】

# 【事例①】AI技術適用範囲（伝承×AI-RAG）

ミズタニバルブ工業株式会社の取組み



## 【事例②】

## 現場発AIイノベーションの鍵は「実装力」

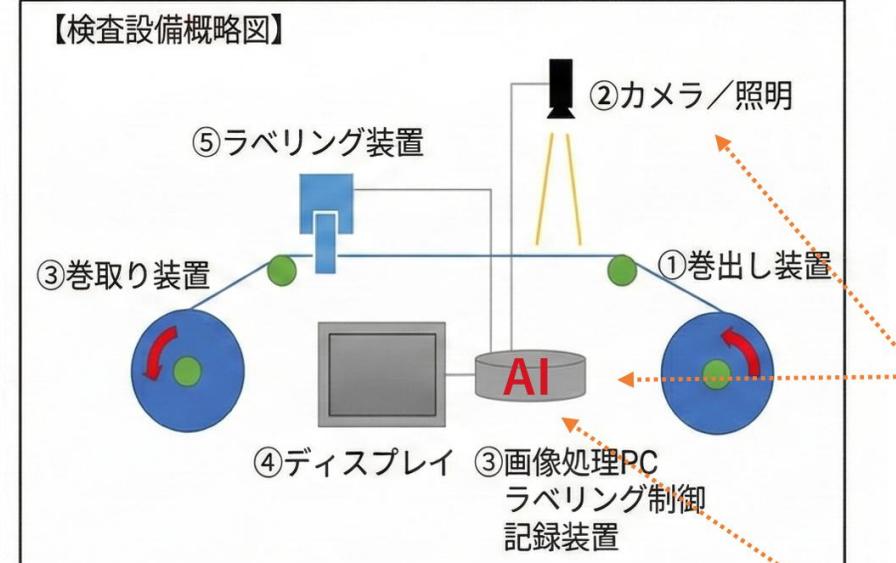
(株)オーツカ、(株)浅原技研、岐阜大学による産学官連携の取組み

## 現状と課題：人手による検査とAI導入の壁

- AI導入＝単なるソフト開発ではない。電気・制御・光学の理解が不可欠



現在の人による検査工程  
(不織布を製造する株式会社オーツカ)

解決策：AI実装による検査装置  
(ハード×ソフトの融合)

「実装力」の要諦：電気・制御・AIを融合したフィジカルAIへの転換  
現場の課題を理解し、全体最適化を支援する仕組みづくり

## 提言と展望：現場型イノベーションの推進

- 技術者には「技術×提案力」が求められる。  
顧客と共に課題を見極め解決する姿勢

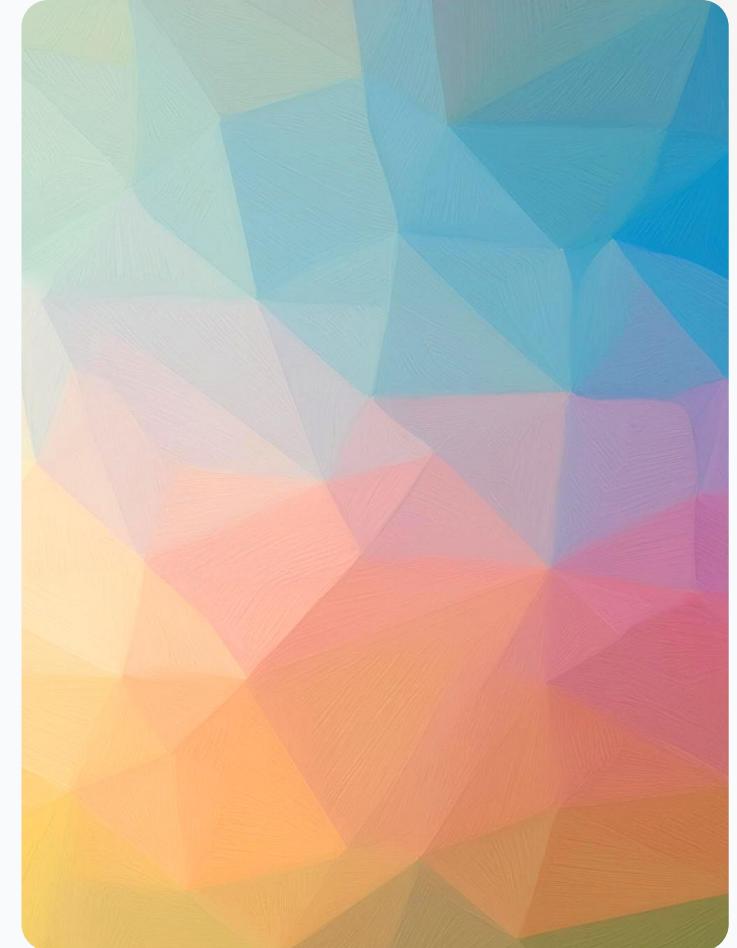
カメラ選定支援  
UI/UXソフトウェア開発  
(株式会社浅原技研)

AI検査アルゴリズム提供  
(岐阜大学)

デジタル化・DX支援を行う民間企業の皆さんから、  
AI活用の考え方についてお聞きしました。

# 「我々はAIに どう向き合うべきか？」

株式会社浅原技研、株式会社インフォファーム、  
株式会社テクノア、株式会社電算システムホールディングス、  
株式会社リーサ、株式会社ユニフェイス  
上記6社に対するインタビュー結果をまとめたもの



# 1. 時代認識

✓ 今回のブームは「本物」で、  
間違いない。

社会構造やビジネスモデルを根本から変えていくこ  
とも間違いない。

## ➡ 求められる「変化への対応」

企業も、地域も、この変化にどう適応するかを常に  
問い合わせ続ける必要がある。

当然、行政も例外ではなく、能動的な対応が求めら  
れる。

## 2. AIの真の価値を発揮させるために

組織として、どう取り組むのか？－という視点が重要。

- **AIの導入自体を目的としない**

AIはDXを進める上での「一つのツール」。

- **「どう使うか」が重要**

AIは万能ではない。

現場の課題に即した形での運用設計が不可欠。

- **コスト制約の考慮**

製造現場などでは、費用対効果の厳格な見極めが必要。

- 現場の課題に対応した形で、**組織として活用されてこそ**、

真の価値を発揮する。



写真はイメージです。

### 3. 組織活用の高度化ステップ

個人利用から組織活用へ。現在の立ち位置を見極め、段階的に高度化。



※RAG：  
内部の知識を検索して  
AIの回答に組み込む  
仕組みのこと

※エージェント：  
自らの状況を判断し、  
計画を立て、外部と  
連携しながら、  
自律的にタスクを  
実行するもの

## 4. 第1歩は「まずは、使ってみる」



### 環境整備が必須

全員がAIを活用できる環境（ツール、権限、ルール）を組織として提供することが、スタートライン。



### 個人任せの限界

「自由に使っていい」だけでは、積極的に使うのは全体の1~2割に留まります。多くの人が「月に一度使うか」どうかという状況に陥りがち。

## 4-2. AI活用セキュリティ・ルール

- **機密・個人情報の厳格管理**：学習データへの混入防止、権限の明確化。
- **不正収集の禁止**：Webからのスクレイピングや、センシティブ情報の推定禁止。
- **不適切利用の回避**：ディープフェイクや差別につながる利用の禁止。
- **著作権・真実性の検証**：AI出力は人間が必ず最終確認（透明性の確保）。
- **AIを過信しない体制**：Human-in-the-loop – 人間が監視・是正する体制の整備。

## 5. 組織にAIを根付かせるためには



### ① 小さな体験を共有

「AIは役に立つ」と感じる人材を増やすため、小さな成功体験（ユースケース）を共有。



### ② 業務分析し、適応領域を

業務でのAI適応領域を部門横断で共に探る。



### ③ プッシュ型支援

継続的なトレーニングやコーチングなど、組織側からの積極的な働きかけも不可欠。

①と②を同時並行的に行う社内での支援が必要

## 6. データの整備とAI活用

データは必要、活用の成否に大きく影響。

だから、データ取得、データ活用のためのDX推進は必要。

AI活用のためにも、

### ■ 現状の課題

すぐにAI活用に結びつく「完璧に集約されたデータ」  
がある企業は稀。しかし、心配する必要はない。

### ■ あるべき姿

「どうAI活用するか」を固めながら、並行して  
データを整備する。走りながら整える姿勢が重要。

## 7. 推進部門（体制）をつくる

組織的として、AI活用の定着を図るために、  
**トップに支えられた** 強力な推進部門が必要。

大企業の場合

専門部署（CAIO等）の設置。

中小企業の場合

総務や企画による横断的専門チーム（COE）が牽引。



写真はイメージです。

## 8. AI活用の組織風土づくり



### ツールを使い倒す文化

どのツールを選ぶかよりも、「選んだツールを徹底的に使い倒す」文化を育てることが重要。



### 最終判断は「人」

AIが進歩しても、ジャッジ（判断）は人間が行う。判断プロセスをブラックボックス化しないことが大切。



### 組織的な支援

個人の努力に依存せず、組織全体でバックアップする体制と風土が成果を生む。

## 9. 進化への対応と地域連携

「AIの進化スピードが凄まじい！」

しかし、それを追っていかざるを得ない。」

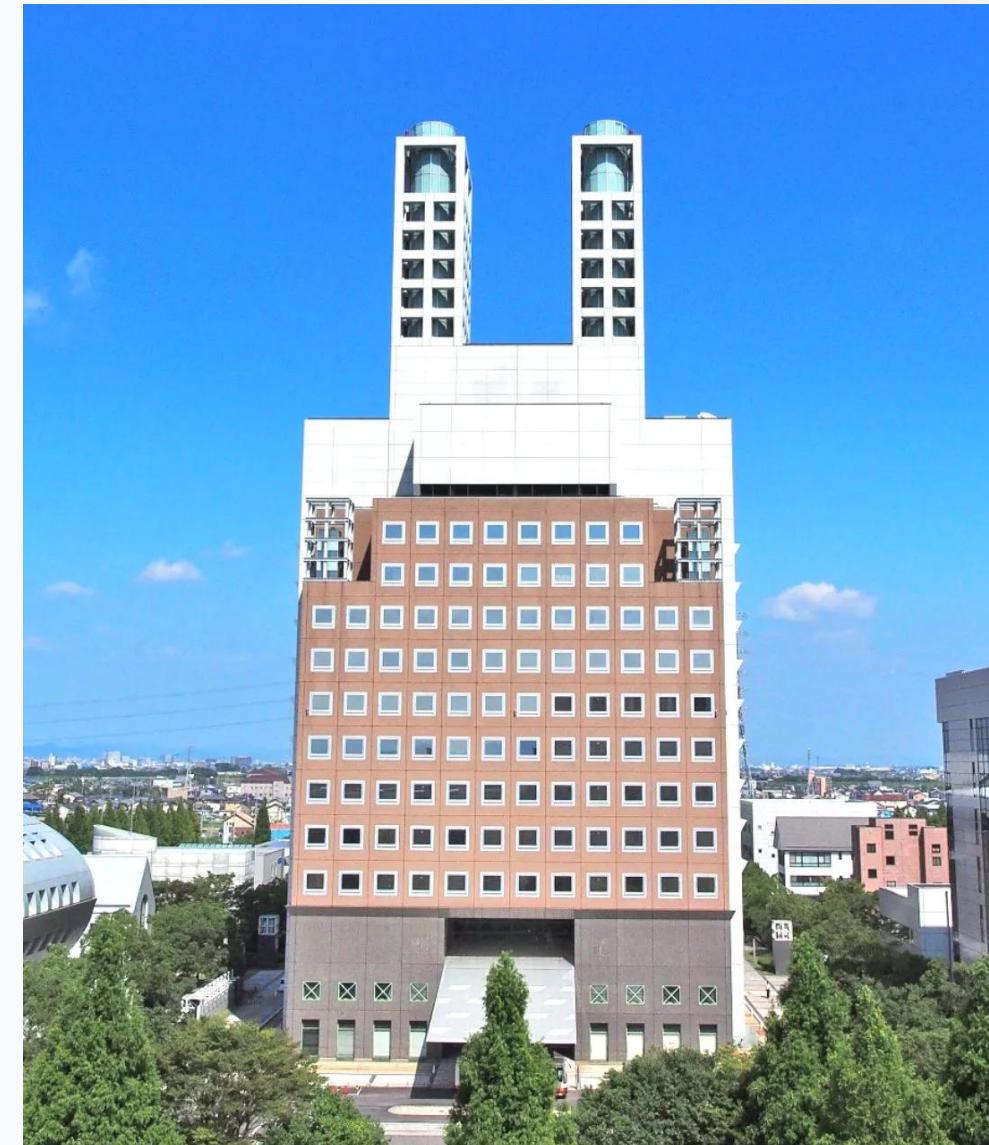
### 地域で共に取り組む

一企業だけで追うのは困難。

岐阜大学などの地元研究機関、大学や支援機関と連携し、  
地域全体で取り組むべきでは。

### 「AI先進県」へ

ソフトピアジャパンを中心とした情報産業集積の歴史・  
文化を活かし、ユースケースを地域で共有・蓄積して  
ほしい。



# 10. AI進化の潮流



## 外部連携 (MCP※)

進化に追いつくため、MCPサーバー等を組み込み、外部AIサービスと連携するのが主流に。

※ MCPサーバー：AIが外部ツールやデータと連携するための共通の技術的な取り決めのこと



## スタッフへの配慮

「今までやってきたことは、何だったのだろう」といった技術進化によるモチベーション低下を防ぐため、丁寧なコミュニケーションが不可欠。



## フィジカルAI

AI搭載ロボットの量産化が進み、工場内への配置が当たり前の時代へ。